

Diverse ではない日本とこれからの日本人

Yuko YASUNAGA 安永裕幸 UNIDO (国際連合工業開発機関)



はじめに

小生がウィーンに着任してから1年半近くが経過しました。私の所属する UNIDO (国際連合工業開発機関: United Nations Industrial Development Organization) は、「包摂的かつ持続可能な産業開発」を進めるために、開発途上国や新興国での工業開発・産業発展のための様々な事業を行っています。私は工学部出身ですが、いわゆる「化学」分野の専門ではありません。「資源開発工学」が(最初の)専門でした。米国では「資源経済学」というのを学びましたし、博士の学位を取得した際のテーマは半導体技術ロードマップの事例をベースにしたいわば技術経営論ですので、この論説欄にお書きになっているほかの方々とは大分様相が異なります。また、私は経済産業省に31年間勤務し、その後はすでに6年半近く国連職員を務めているわけですが、その間、国際的な石油・エネルギー市場の問題、日米半導体摩擦と半導体研究開発、ASEAN 経済危機対策、e-commerce の消費者保護と流通・物流問題、NEDO に出向しての独法の仕組みづくり、研究開発政策、都市ガスの安全確保、世界各国での鉱物資源開発、産業技術政策・標準化政策の推進、産総研に出向しての様々な産学連携の仕組みづくり、といった雑多な仕事をやってきましたので、何一つ「これが真の専門だ」と胸を張れるようなテーマがありません。そこで今回は、海外で多国籍の同僚と一緒に仕事をして感じた「Diverse でない日本と日本人の個性」について書いてみることにいたしました。

異文化とのコミュニケーションとは何か?

私は、役人時代に国際交渉に従事する機会が多く、また、UNIDO の東京事務所で5年間所長をしていたので、いわゆる外国人の同僚たちのコミュニケーションにそれほど苦勞することはないだろう、と甘く考えていました。現実には想像とは大違いでした。まあ、いろいろな non-native の英語がわかりにくい等というのは別にしても、どうもこの人たち、説明がやたら長い。「俺だったら3分で言えるけどなあ(3分しかネタが保たない、とも言える)」ような話を30分くらいしている。これは欧州的文化なのか国連的文化なのかいまだによくわからないのですが、紙の資料も同じです。こちらが説明資料(pptの紙芝居)を作るのに、せいぜい数字が2カ所とキャプションが2行程度あればいい

のに、「これ、教えて」と言うと、馬に食わせるような添付資料を付けたメールで回答がくる。「俺、これを全部読まないといけないワケ?」と言いたいところです。親切なのか嫌がらせなのかもよくわかりません。そのうち、私も会議等では長々した同僚の説明のあと、「要するに、君の言いたいことはこういうことだろ?」とその場で2行で乱暴に言い切る、という技を強引に繰り出すようになり、そうするとコミュニケーションが一方的でなくなる、ということ学びました。「要約する」のが怖いのか、コミュニケーションの効率というものへの考慮が欠けているのか、まあこういう姿勢は問題ですが、少なくとも「ポイントは3つまで」「中学生にもわかるように資料を作れ」と教育されてきた我々(厳密には、日本社会の特質ではなく霞が関文化ではありますが)にとっては、まさに「目から鱗」の毎日ではあります。

「日本」はどう見えているか?

この UNIDO という組織においても、残念ながら日本のプレゼンスは相応に高いとは言えません。日本は中国に次いで高い分担金を払い、任意拠出金という形で様々な開発途上国への協力を支援しているにもかかわらず、です。「カネも(もっと)出すから口も(もっとも)出す」というのがあるべき姿ではないかと感じる毎日です。

日本の科学技術力は、内実は非常に危機的な状況にあると思いますが、まだまだ世界では尊敬される立場にあります。アフリカ諸国の閣僚や首脳は、「日本は天然資源に恵まれないのに、頭脳と勤勉と磨き上げた技術で一流国になった。どうしたら我が国がそうなれるのか教えてほしい」と真顔で問いかけます。私は、今は国連職員として特定の国の立場には立てませんが、そういう場合には、知る限り、日本の経験で役立ちそうなことはお話しするようにしています。この話をしていると思うのは、やはり明治維新以前からの日本人の「読み書き、そろばん」という基礎的スキルの充実と、明治以後の「帝国大学」や「国立研究所(当時、多くは試験所と呼ばれていましたが)」といった科学技術の教育・研究機関をいち早く設立したことにあるような気がします。私としても、こうした日本の経験をそれぞれの国の国情に合わせて伝えるような仕事をしたいものだとは常々感じます。

日本という「Diverseでない社会」

さて、では一体、「日本」とは何だ、ということをごのヨーロッパの片隅で考えてみることにします。ウィーンに住んでいると、実にいろいろな国の人が住んでいるのに気が付きます。職場は当然としても、欧州各国のみならず、トルコ、アラブ系、アフリカ系、アジア系、様々な人種が特に違和感なく共存しています。いや、水面下ではいろいろなコンフリクトがあることも否めませんし、物乞いやホームレスの姿も目に付きます。しかし多様な国の人々が共存していること自体への疑問もほとんど感じません。もちろん、仕事の場では「ドイツ人ってなんでこんな石頭なんだ」とか「イタリア人って、皆（ここにいる人たちは）勤勉だし柔軟で一緒に仕事しやすいなあ」とか、「アラブ系は、男も女も任侠に生きている人たちで、昭和人の俺とは気が合うな」とか、考えるわけですが同時に日本人も「何だかおとなしいけど、真面目な奴らだな」と考えられているように思えます。

私は「日本って、金太郎飴だな」と感じます。（国連では別で、むしろ女性が多数派ですが）「男ばかり」「オジサンばかり」の社会で、なおかつそうした人たちの行動様式も似通っているからです。もちろん、「日本も段々変わってきている」のは事実でしょうが、「世界はもっと速く変化している」ので、「差は開く一方」なのです。米国は特に9.11事件以降、内向きになったと言われますが、それでも世界の80億人の中の、最もアタマが良く、最も野心的な人たちが集まるわけです。一方で日本は、いまだに1億2000万人の中で、しかも女性が社会的・文化的にどうしても不利な立場に置かれやすい状況下では、もしかしたら6000万人で何とかやりくりしようとしているかもしれないのです。これでは絶対に「勝負」にはならないのは明らかです。

私がもう1つ「あ～あ」と思うてしまうのは、政府が得意な「オールジャパン」の取り組み、という紋切り型です。もちろん、日本政府は日本国民の収めた税金で仕事をしているのだから、日本人だけで取り組みたいのはヤマヤマでしょう。が、このグローバル化した社会でそれでは間に合わないことは中学生でもわかります。技術流出等、様々な課題があるのは承知していますが、それでも、「日本人だけ」ではない勝負の仕方、というのを開拓してほしいと思っています。

いや、わざわざ開拓しなくても、ロールモデルはそこらに転がっています。例えば大相撲の世界。私はこの15年間くらい大相撲の番付表を定点観測していますが、幕内力士42人のうち、いわゆる外国籍力士は最低8人、最大12人の間を推移しています。国技と言われる大相撲でも2ないし3割は外国籍力士によって支えられているのです。

これを先取りしたのが例えばプロ野球の外国人選手たち。日本人は、それこそバッキー（阪神）、スタンカ（南海）の時代から今日まで彼らの活躍に喝采を送り、「青い目のサムライ」等と称賛してきました。

また、さらに進んでいたのがプロレスファンの世界で、すでに1960年代末には、日本人エース人材難に

陥っていた国際プロレスのエースは「人間風車」ビル・ロビンソンでした。70年代には全日本プロレスの世界最強タッグ決定リーグ戦の花形は「G馬場・J鶴田」組ではなく、「テキサス・ブロンコ」ザ・ファンクスと「最凶コンビ」ブッチャー・シーク組だったわけです。私は、日本人は、決して閉鎖的ではないと確信していますが、一方で、歴史的、地理的そして言語的に見れば、日本人が異文化の人々とコミュニケーションを取るのが上手くはないというのも事実だと思います。

様々な分野で「外国人や女性」の活躍の重要性が謳われていますが、カネや太鼓で囃し立ててもなかなか現実には進んでいきません。Quota制や種々の制度的な措置が話題に上りますが、実態が大きく変わった感じも残念ながらほとんどありません。むしろ、この点に関しては日本社会は開き直って保守的になっているのではないかという疑問さえ頭をよぎります。これに対する解は簡単ではありません。私は、むしろ「日本語のできない日本人」、「日本人に見えない日本人」を増やしてもっと身近に付き合うべきだと感じます。

外国人に囲まれて生活していると、実は彼らも我々と同じ悩みを抱えながら生きていることがわかります。上司の前では「ヒラメ」になる奴、八方美人だけど本心を自らは明かさぬ奴、決してリスクを取らなくて済むように行動する奴、等々。そういうことがわかってしまえば、あとはいかに胸襟を開いて接するかが大事になります。もちろん、人間だから好き嫌いは当然あって構わない。「どうもこいつは暖簾に腕押しだな」、「あいつは虎の威を借る狐だから、あまり真に受けないようにしよう」、「よし、俺はもうこうなったらケツをまくるぞ」といった本音は、実はどの国の人たちにも一定の共通理解を得ることができます。

外国人とのコミュニケーションの話が中心になりましたが、女性についても同様です。国際機関では、半分程度が女性であるというのがむしろ普通です。普通に仕事して、普通に話をすれば何も変わったことはありません。日本のジェンダーギャップは国連の調査によれば世界の125位くらいというとんでもない後進国ぶりですが、なぜそうなっているのか。この国に育ち、国際社会に身を置いている私にもわけがわかりません。

社会を変えるのは、固定観念にとらわれない若者、枠組みに収まらないバカ者、そして今までのやり方を知らないよそ者ということが言われます¹⁾。女性や外国人との協働が普通になったら、次はどう「バカ者」の智慧を社会に取り込んでいくかが課題になるでしょう。そういう時代が5年以内に来ると良いと思うのは私だけではないと思っています。

1) 真壁昭夫, 若者、バカ者、よそ者 イノベーションは彼らから始まる!, 2012, PHP 新書.

ここに載せた論説は、日本化学会の論説委員会が依頼した執筆者によるもので、文責は基本的には執筆者にあります。日本化学会では、この内容が当会にとって重要な意見として掲載するものです。ご意見、ご感想を下記へお寄せ下さい。
論説委員会 E-mail: ronsetsu@chemistry.or.jp